私たち一人一人が自分の生活を振り返ることから

あなたの「ふつう」はみんなの「ふつう」？

自分にとっては「ふつう」と思っていたことが、他の誰かにとってはそうでないことに気付いたことはありませんか。

コロナ禍で感染対策が求められていたときは「マスクを着けるのが『ふつう』」「手指消毒をするのが『ふつう』」だと思っていた人が多いのではないでしょうか。しかし、さまざまな理由でマスクを着けられなかったり、手指消毒をできなかったりした人もいたはずです。

多くの人がやっていることを「ふつう」だと捉えてしまうことで、その「ふつう」に当てはまらない人が見過ごされてしまったり、その人の思いや困っていることに気付きにくくなったりします。あなたにとっての「ふつう」が、他の誰かにとってはどうなのか、立ち止まって考えてみませんか。

私の中の「思い込み」

吹き出しの中には、どんな言葉が入るでしょうか。もし「たけしさん、男性なのにすごいな～」や「ふつうは逆じゃない？」といった言葉が浮かんだなら、そこには社会の中にある性別による役割分担意識が影響しているのかもしれません。

私たちは、日常生活の中で知らず知らずのうちに、さまざまな思い込みや偏見が刷り込まれてしまっています。そうした思い込みや偏見が、自分自身や誰かの「自分らしく生きること」を邪魔してしまってはいないでしょうか。「女性だから…」「外国人なのに…」「障がい者は…」とひとくくりにして思い込んでしまっていた自分の意識にまず気付くことが、お互いを尊重し一人一人が自分らしく生きられる社会をつくることにつながります。